

サンパウロからバークレーへ

—ふたつの移民都市をめぐって—

松岡秀明

「誰か、小銭くれない？」投げやりな口調の女の低い声がバスのなかに響く。窓から外のざらついた風景をぼんやりと眺めていたぼくらは、驚いて声のする方に目をやった。おそらくホームレス⁽¹⁾だろう、みすばらしい身なりの痩せた若い女が、停留所に止ったバスの入口で料金1ドル10セントを乗客に乞うているのだった。

1月のある日の午後2時すぎ、ほくと妻はバスでオークランドに向かっていった。この路線バスは6つの市を通り抜けるため、かなりの距離を走る。バークレーの北にあるリッチモンドから海沿いに南下し、ぼくらが住んでいる大学の既婚の学生用アパートがあるアルバニーを通り、バークレーを抜け、サンフランシスコの外港オークランドまで行く。バスがバークレーを過ぎオークランドに入ったあたりから、乗り込んでくる人たちの身なりがだんだんと粗末になってくる。それと平行して風景も殺伐としてくる。車道に乗り捨てられたままになっているらしいポンコツ車、倒産したと思いきベニヤ板で囲われた建物が目につくようになる。窓に鉄格子を施したりカー・ストアー、自動車修理工場、倉庫、手形割引き屋。歩道もごみで汚れている。彼女がバスに乗り込んで来たのは、そんな状況だった。アメリカではバスの中で強盗にあっても誰も助けてくれないという警句を思い出して、緊張を禁じ得なかった。バスはそういう風景の中を20分ちかく走り続けたらどうか、オークランドのダウンタウンの高層ビル街が見えてきた時には、ほっとすると同時に肩がひどく凝っているのに気づいた。

日本で過ごした去年の夏は慌ただしかった。サンパウロ大学への留学とサンパウロ人文科学研究所での客員研究員の任期を終えて東京に戻ったのは7月5日だった。カリフォルニア大学バークレー校の人類学(社会・文化人類学専攻)の Ph.D.

プログラムで学ぶために、ここにやってきたのが8月18日だった。サンパウロとバークレー、このふたつの都市は、アメリカ合衆国とブラジル連邦共和国という移民国家のなかでも際立ってさまざまな人種が住んでいるという点では共通している。海外で最大の日系人口をかかえるサンパウロには、ポルトガル系、アフリカ系はもちろんのこと、スペイン系、イタリア系、ドイツ系、インド系、中国系の人々が住んでいる。混血をくり返しているため、自分の出自がどこか分からない人も多い。一方、アメリカの国勢調査は、非スペイン系白人(Non Hispanic, White)、スペイン系(Hispanic)、黒人(Black)等々というカテゴリーで人種を分類している。バークレーの人種構成は、この3つの人種にアジア系が加わったものだ。英語、スペイン語はもちろんのこと、中国語、韓国語、ベトナム語でも電話の加入、案内を聞くことができる。サンパウロではあまり見かけない東南アジア系の人たちもここには多く、大学の周辺ではベトナム系、タイ系、カンボジア系の人々が経営する安食堂がしのぎを削っている。

都市の規模は全く異なる。バークレーは典型的な大学都市で、人口は10万もないのに、教官、学生、事務職員などの大学関係者は3万を超える。25キロ離れたサンフランシスコでさえ人口100万に満たない。それに対して、サンパウロは南米最大の都市であり、人口も1000万に近い。しかし、この二つの都市にはより本質的な部分で相違がある。それは、〈差異〉と〈連続〉という比喻で理解することができるようなものだ。

ブラジル北東部の大都市に生まれ育ちサンパウロで学び、バークレーに留学してきたブラジル人の大学院生と知り合いになった。白人の彼は、アパートを探す時に住人のほとんどが黒人という地区に知らずに入り込み、彼らに冷やかされたとい

う。「ブラジルでは、一度もこんな経験をしたことはない。」と彼は言うのだ。彼のこの落胆には、サンパウロとパークレーの二つの相違が端的に示されている。ここでは、地域によって住人の人種がはっきりしていること。もう一つは、人種間の軋轢がサンパウロとは比較にならないほど大きいということだ。

去年の秋、人類学の大学院生のマイノリティーのためのパーティーがナイジェリア出身の黒人教授の家で催されるので来られたしという招待状を受け取った。ぼくらは、韓国からの留学生と出かけた。教授の家は高台の高級住宅地にあった。そのパーティーには、アメリカ国籍を持つと持たないを問わず白人以外の大学院生が招かれていた。具体的には、アメリカ人では黒人、白人と黒人の混血、インディアン、アジア系。そして白人以外の留学生。教授はマイノリティーの不利な立場をひとしきり強調したあと、それではどのように権利を主張すべきかを延々と説いた。しかし、何人かの留学生は所在なさそうにしているようにみえた。たとえば、モザンビークからの黒人の留学生は、いうまでもなく、母国ではたいへんなエリートである。帰る道すがら、留学生の間で白人ではないという判断基準が留学生にも適用されてしまうのはどうかという話しになった。ようするに、ここでは白人 (caucasian) か有色人種 (colored) か二分法がまず最初のクライテリアで、有色人種はおしなべてマイノリティーなのだ。そして、そのマイノリティーの間で、さらにはある人種のなかでさまざまな対立がある⁽²⁾。サンパウロは人種の坩堝だ。カフェ・オレの色が理想の肌の色としてあげられることがあるのがブラジルだ。アメリカに比較すると、人種という概念ははるかに希薄とっていい。それに対して、パークレーは人種のサラダといった状況を呈している。さまざまな人種は——もちろん例外はあるにせよ——それぞれの人種としてあり、混ざり合っていない。

住む地域も人種や階層によって細分化されている。冒頭のエピソードで、バスは20分ちかくも「ざらついた風景」の中を走ったと書いたが、こうしたことはサンパウロでは——少なくとも市街では——あまりない。サンパウロ市街をバスで30

分も走れば、同じような風景が延々と続くということではなく、さまざまな階層の住宅を見ることができる。このなかには、ファベラと呼ばれる貧民街が一つや二つはあるはずだ。それは廃材を集めてつくったようなバラックの集団で、視野のあなたに忽然と現れては消えていく。一般の住宅地からなんらかの空き地を隔ててファベラとなっている場合もあるが、普通の住宅地に隣接している場合もしばしばある。時には高級マンションが立ち並ぶ地区に続いてファベラがあったりする。そういう突泊子の無さは、パークレー周辺では出くわさない。ここでは、人種・階層によってひとびとは細かく住み分けている。パークレーは西を太平洋、東を小高いグリズリー・ピークで区切られている。海から東へ向かうと、マリーナ周辺のこぎれいな店がある一帯を過ぎると、貧しい人々が住む地域がしばらく続く。そこを抜けると、中産階級が住む一帯を経てキャンパスに至る。そこから勾配がきつくなり、丘を登ることになる。裕福な人々が住むこの丘からの眺めは素晴らしく、サンフランシスコ湾をはさんで金門橋やサンフランシスコ市街が一望できるし、りすはもちろんのこと鹿が現われたりする。以前は住人たちの抵抗があって、有色人種は金を持っていてもなかなかこの丘の土地を手に入れることができなかったようだ。この丘には、実業家、弁護士などなどにまじって、パークレーの教授も多く住んでいる。太平洋とこの丘の中間にあってそれ自体傾斜しているキャンパスには、あたかもこの丘の高みからく知が供給されているかのようだ。

オークランドでの用事を済ませ、再び同じ路線のバスに乗り換えて家路についた。黒人の乗客のウォークマンのヘッドフォンからかすかにラップが聞こえてくる。5時近くになって薄暗くなった大通りを、明らかにそれと分かる格好をした白人の娼婦が歩いている。遠くに目をやると、パークレーの丘が夕陽に照らされて浮きたって見える。ここにきてから、この時ほど混沌としたサンパウロをなつかしく思い出したことはない。

(1) ホームレス・ピープルはしばしばスーパー・マーケットのショッピング・カートを持っている。も

ちろん黙って頂いてくるのである。彼らは家財道具一切をこのカートに詰込んで都市の中を漂泊する。驚くべきことには、このカートをホームレスから「回収」し元の店に戻す業者が存在するという。彼女は、カートこそ持っていなかったが、大きなビニール袋に衣類を詰込んで持っていた。なお、パークレーにはホームレスがたいへん多い。行政がホームレスに対して補助を行っていたため、彼らはパークレーに集まって来たのだ。その後、政策が変わり援助は打ち切られて、彼らは放り出されたかっこうになり現在に至っている。

(2) ロス暴動で、韓国系住民が黒人に襲撃されたこと

は記憶に新しい。折しもこの2月、パークレーでも韓国人のスーパーマーケット経営者と客のパークレーの黒人学生のいさかいは、それぞれのコミュニティを巻き込み、黒人によるそのスーパーでの不買運動にまで拡大した。一方、人種のなかではどうだろうか。黒人を例にとると、黒人のなかでも肌の色の濃淡で差異化が行われており、肌の色がより濃いものがより劣位におかれるという。Bill Maxwell. *The Skin-Color Dilemma*, *San Francisco Chronicle*, Feb. 27, 1993. および Milt Hinton & David. G. Berger, *Bass Line*, Temple Univ. Press, 1988, p.38を参照のこと。